3　堀金

堀金は安曇野市の西部に位置し、常念岳を源とする烏川扇状地によって形成されている。地域の約３分の２は山地で、標高700㍍付近から万水川までが水田を中心とした平地となっている。

堀金には東傾斜の田園風景の中に比較的規模の大きな屋敷林が点在し、常念岳を背景に美しい景観を形成している。

3-1 岩原（いわはら）　山麓にたたずむ屋敷林

安曇野市堀金烏川

道路沿いの生け垣と板塀に囲まれた屋敷林

道辻に立つ新屋の双体道祖神

田多井堰沿いに続く、美しい石垣と生け垣

岩原の集落は烏川扇状地の扇頂に位置し、その地名は石混じりの畑が多かったことによるものであろうが、烏川上流には定規岩・冠岩・屏風岩などの大きな岩が点在し、これが地名の由来となったとの説もある。

中世には烏川から引いた岩原堰によって開発が始まったようで、西の背後には岩原城跡がある。城主は細萱氏から仁科氏の支族堀金氏に代わったとされる。その麓には明治の排仏毀釈（はいぶつきしゃく）で廃寺になった安楽寺跡がある。

江戸時代、寛永４年（1627）の検地の際に堀金村から独立し、寛永19年には139石余とみえる。烏川の奥には松本藩の藩林があり、岩原村の庄屋山口家がその材木奉行を兼務した。山口家は南安曇の諸村で構成される長尾組の大庄屋も長く勤めている。

岩原の屋敷林

県道鍋割穂高線（通称・山麓線）と田多井堰に挟まれた新屋という小さな集落が、複数の屋敷林を形成している。Ｓ字にカーブした東西道路が屋敷林の景観に変化を与え、カーブ正面のケヤキの大木がラ

カーブの正面に立つケヤキの大木

石垣に囲まれた屋敷林とケヤキの大木

北側から見た山麓線沿いの屋敷林

ケヤキの大木へと続く緑の小路

ンドマークとなっている。また、田多井堰沿いには美しい石垣と生け垣が連続し、屋敷林と農地を明確に区分している。

新屋の道祖神

岩原村には北から北海渡、上手、中村、新屋などの集落があるが、新屋集落の山麓線沿いに西面し、基壇を上げ屋根を掛けた双体道祖神がある。高さ120㌢、幅90㌢の大きな白い花崗岩の自然石を用いており、背面には「当村石師千代吉」と刻まれていて、製作した石工の名が知られる。石工の名が刻まれた道祖神碑は南安曇に6基、北安曇に5基と少なく珍しいという。

3-2 川口（かわぐち）　常念岳の麓の屋敷林

安曇野市堀金烏川

花に彩られた丸山宅のアプローチ

斉藤宅の屋敷内に建つ漆喰海鼠壁の土蔵

多様な樹種で構成されている丸山宅の屋敷林

川口集落は、岩原・倉田・扇町の村境に位置し、上堀金堰と下堀金堰の取入口に近いことが地名の由来といわれている。寛政４年（1792）から文政４年（1821）にかけて、川口村として独立しようとしたが、戸数が足りなかったために認めらず、現在も行政区分上は岩原・倉田・扇町の各区に属している寄り合い集落となっている。

親村の一つ、岩原は寛永４年（1627）の検地の際に堀金村から独立し、岩原村として成立したが、倉田は元禄年間（1688 ～ 1704）に上堀金村から新切（開発）され、扇町は元禄12年（1699）に柏原・下堀金両村の入会原に開発されたが、それぞれ村としては独立せず、上・下堀金村の枝郷にとどまった。

そのくらい後発の地域だったのは、水に乏しく容易には水田が開かれなかったためであるが、江戸後期に開かれた拾ヶ堰により、下流の余水を上流側で使えるようになったりして、現在のような一面の水田風景が生まれたのである。

川口の屋敷林

常念岳へと続く県道沿いの北側に、美しい屋敷林

母屋の手前に建つ斉藤宅の旧蚕室

道端の石垣の上に立つ馬頭観音

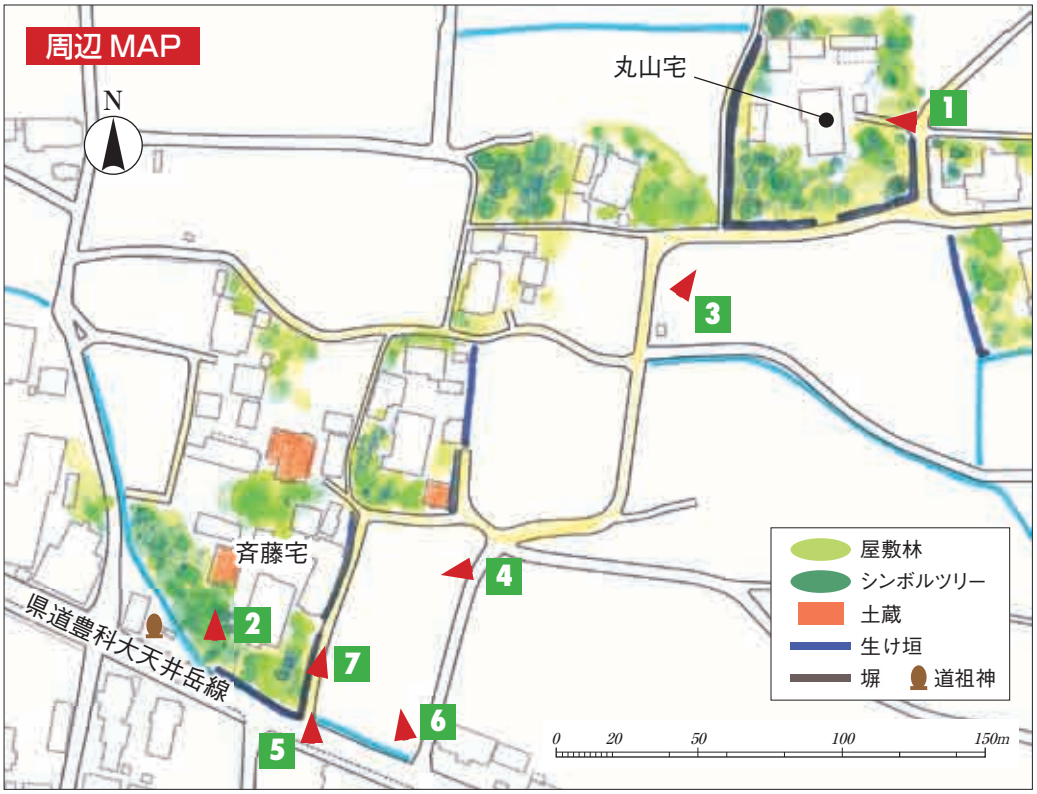
水鏡の田んぼに映る美しい屋敷林

道路沿いに続く直線上の石垣と生け垣

が点在している。どの屋敷も敷地が広く、未舗装の道路や旧蚕室の建物、海鼠（なまこ）壁の土蔵などが、屋敷林の景観のアクセントになっている。屋敷林の背後には常念岳が間近に迫り、田園風景と北アルプスとの調和が美しい。

川口の石造物

須砂渡に向かう県道の脇に、6基の石碑を祀った一角がある。いずれも江戸後期のもので、奥から二十三夜塔、庚申像、天神宮、双体道祖神、道祖神文字碑、念仏供養塔であるが、どれにも造立者は「川口村中」と彫り込んである。



3-3 扇町（おうぎまち）　道沿いに続く緑の屋敷林

安曇野市堀金烏川

唐澤宅を西から見る

かつては県道であった静かな通り

堀廻（新堀）堰沿いに続く桜並木

扇町は、堀金・柏原両村の入会原を元禄12年（1699）に開墾してできた集落である。集落を東西に貫く道を中心に南北に町割され、北は柏原村と接している。集落全体が扇を広げた形となっていることから、末広がりの縁起を含めて扇町と呼ばれるようになった。

この一帯が水田化されるのは文化14年（1817）以降で、拾ヶ堰の開削後のことである。拾ヶ堰の開削によって、下堀金堰に余水が生まれたことで開田が可能となったが、水田は全体の３分の１に過ぎなかった。下堀金村の枝郷として幕末に至った。

扇町の屋敷林

南側のバイパス道路完成によって、県道の旧道沿いに古い集落と屋敷林が昔のまま残っている。水路のある旧道沿いにケヤキの大木が点在し、両側のイチイの生け垣と合わせて、緑がトンネルのように連なっている。敷地の南側には雑木林が残り、自然樹形の落葉高木が背景の常念岳の美しいアクセントとなっている。また、集落の西側には堀廻（新堀）堰沿いの桜並木があり、桜の名所でもある。

唐澤宅の水車小屋跡

常念岳を望む通り

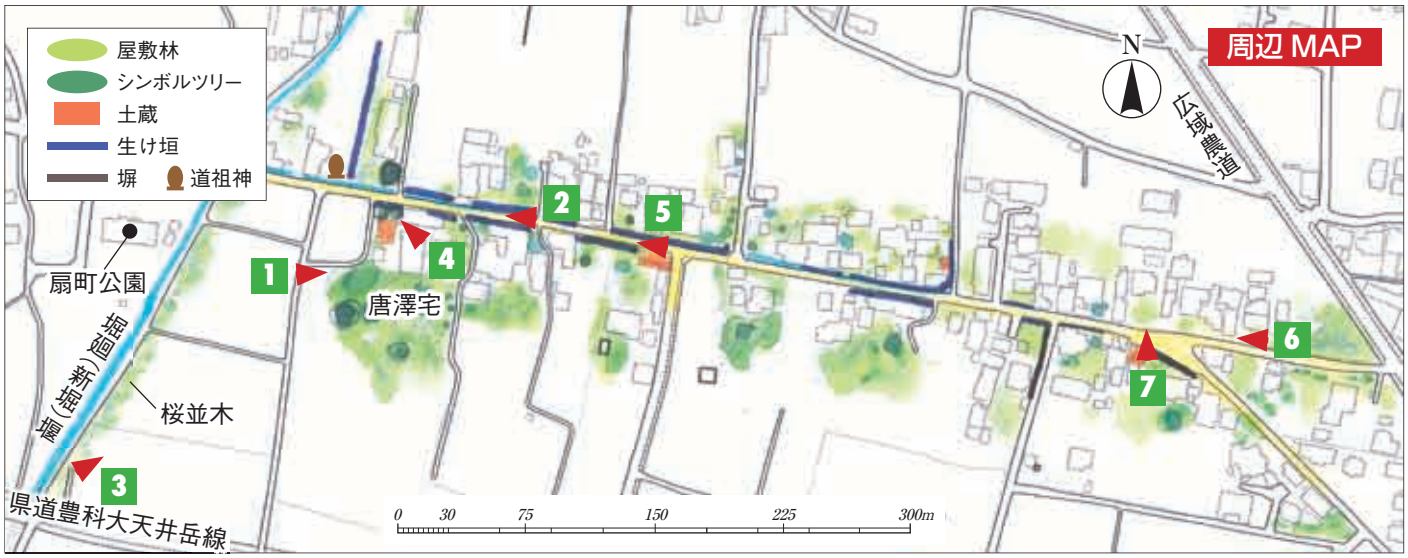
扇町の変形三差路

昭和 30 年代の共同井戸跡

集落内の旧道に沿って石積みの水路が流れ、本棟造などの規模の大きい家屋や、瓦屋根に白壁の立派な土蔵が建ち並んでいる。集落内には阿弥陀堂跡の碑があり、集落境には道祖神と馬頭観音が並んだ祠（ほこら）や、二十三夜塔や庚申塔などが並んで祀られている。

唐澤宅の屋敷林

約1,650坪の敷地にケヤキ・キハダ・サイカチ・シナノキなどの多彩な広葉樹が植えられ、屋敷林というよりは雑木林の森のようである。母屋の建物は築約85年で、水田に面した西側には「おかしら」の文字が刻まれた土蔵、街道に面した北側には水車小屋も残っている。現在は鉄板に覆われている水車小屋の屋根は以前は茅葺であった。



3-4 下堀（しもほり）　河岸段丘沿いの屋敷林

安曇野市堀金烏川

街道沿いの屋敷林と本村の道祖神

土蔵が残り板塀が続く趣のある小路

水路や源氏塀が美しい屋敷林沿いの小路

下堀は烏川扇状地の扇端に位置し、中心となる本村集落の東は河岸段丘崖となって一段下がっている。烏川の自然流を利用した下堀金堰によって古代から開発された地域で、字（あざ）中村からは土師器が出土している。

下堀金堰は途中で神明沢・中沢・北沢に分かれるが、中沢は別名を二日市場堰といい、このあたりに中世の二日市場があったことを示している。古地図には古町・町浦・町はりという町割に関係した地名も見られる。

江戸前期の慶安４年（1651）の検地で上・下堀金村に分かれている。文化13年（1816）の拾ヶ堰開削は下堀金村を含む10か村によって計画されたもので、同村の平倉六郎右衛門は測量と土木工事の指揮に当たっている。この拾ヶ堰開削によって下堀金村の石高は230石余増加した。

下堀の屋敷林

屋敷林の残る集落は、拾ヶ堰西の諏訪神社の東側と、河岸段丘沿いの二つの地区に分かれている。諏訪神社の東側は表参道にあたる旧道沿いに屋敷林が

河岸段丘上段の大木が形成する緑のトンネル

常念岳を背景にした美しい田園風景と屋敷林

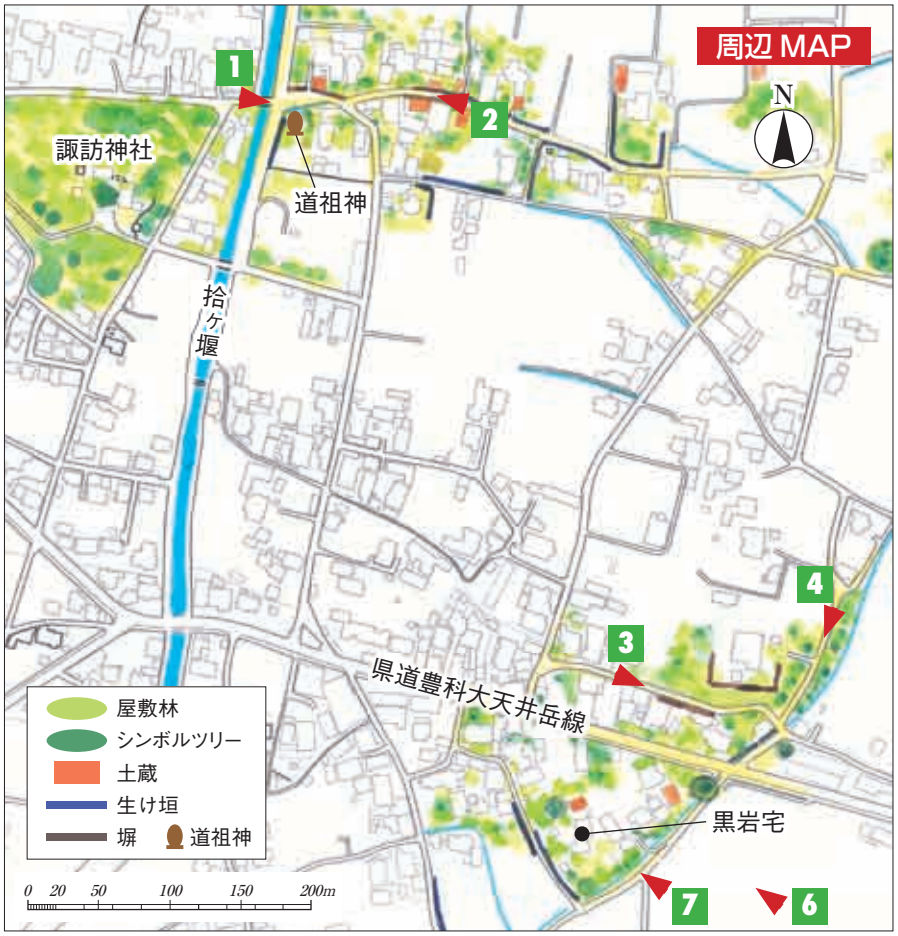
段丘崖に沿って斜面林を形成している黒岩宅の屋敷林

河岸段丘沿いに連続している屋敷林

点在し、板塀や土蔵とともに歴史的な風情を感じさせる。河岸段丘沿いには南東斜面に沿って屋敷林が斜面林となって連なり、常念岳を背景に美しい田園風景を形成している。また、集落内には傾斜地に小路が多く残り、多様な樹種の屋敷林と石垣や生け垣が独特の集落景観となっている。

黒岩宅の屋敷林

河岸段丘沿いの高台にあり、南風を防ぐために南側にも屋敷林が広がっている。昭和30年代に陽あたりを確保するため、南側のケヤキの大木を３、４本伐採したようである。以前あった本棟造の母屋は昭和50年代に建て替えられたが、敷地内の４棟の土蔵は今も残っている。



5 は地図外

3-5 西小路（にしこうじ）　小路沿いの屋敷林

安曇野市堀金烏川

カーブした小路の正面に位置する米倉宅の屋敷林

古民家再生した建物とクロマツが調和した米倉宅の屋敷林

広大な敷地を覆う唐沢宅の屋敷林

西小路が含まれる上堀は江戸前期の慶安４年（1651）の検地で堀金村が上・下堀金村に分かれたものだが、ここは烏川からの自然流を上堀金堰として利用し、古くから開発され地域である。堀金小学校付近の遺跡からは平安前期の住居址が見つかり、「惣道寺」と書かれた墨書土器が出土している。

ここに古道の仁科道が通っており、中世には仁科氏の支族・堀金氏が居館を築き、城下集落が形成された。居館跡は通称「堀屋敷」と呼ばれ、その前を大庭といい、ほかにも蹴出（けだし）・佃（つくだ）・番匠田などの地名が残っている。また、南の町尻には小林寺・大覚寺・大勝寺の寺を集め寺町をなしていた。

西小路はこうした城下集落の西の部分で、堀金氏支配下の地侍たちが集住した区域と考えられる。

上堀西小路の屋敷林

諏訪神社から北西に向かう街道沿いに、大規模な屋敷林が連続している。広大な敷地に立派な庭のある屋敷林も多く、諏訪神社の寺社林から連なる迫力のある森のような景観となっている。屋敷林は北側に比較的多く配置され、スギ・ヒノキ・ケヤキの高

水鏡に映る美しい屋敷林

屋敷林の中を通る緑のトンネルをなす小路

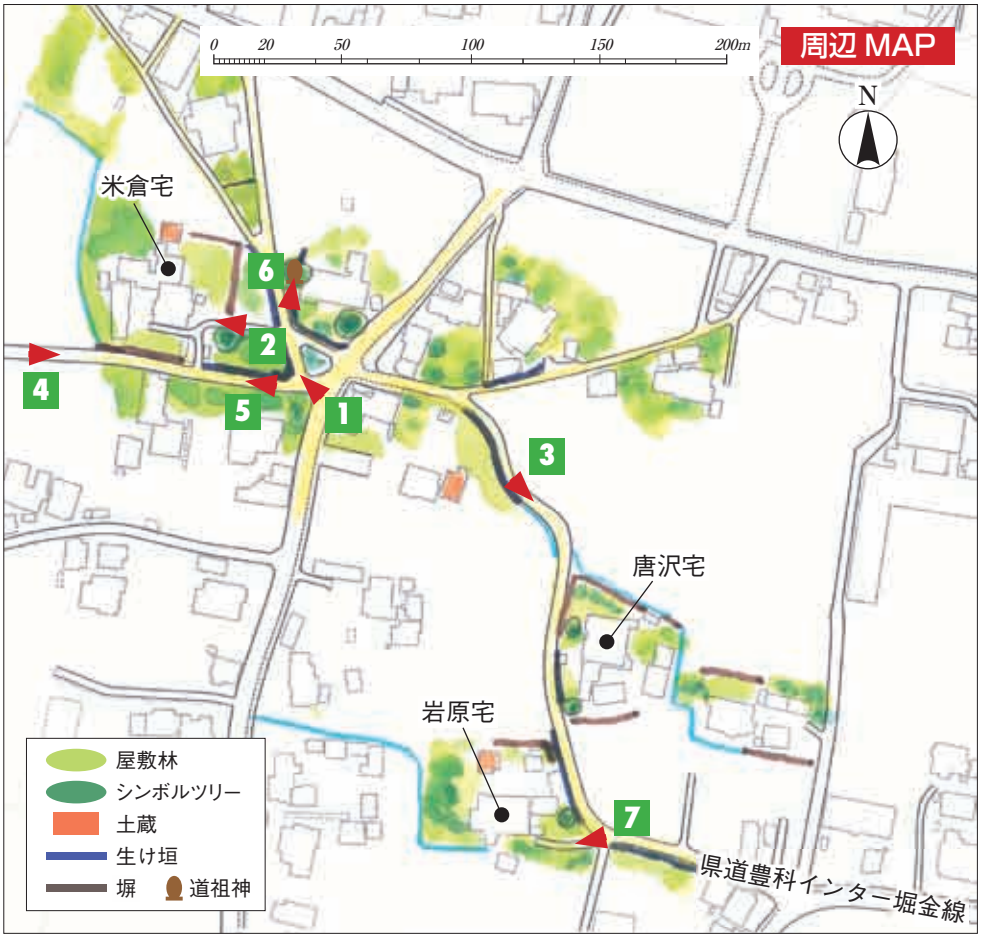
道端の桜の古木の下に立つ双体道祖神

岩原宅のコナラの古木の切り株（元長野県天然記念物）

木が多く見られる。かつてケヤキの巨木があり、巨大な切り株が残されている屋敷もある。

米倉宅の屋敷林

玄関のクロマツは樹齢約300年で、門かぶりになっている。庭の手入れは２年に１度、庭師一人で約５日がかりで行い、剪定した枝は木の根元に置き肥料としている。母屋は約13年前に外観を活かして古民家再生したもので、庇（ひさし）が吊（つり）構造となっている北側の座敷は、堀金の寺の庫裏（くり）を移築して利用している。



3-6 南原（みなみはら）　松本城の城門に映える屋敷林

安曇野市堀金烏川

明治時代に松本城から移築した青柳宅の旧松本城城門（安曇野市有形文化財）

道端に並ぶ道祖神などの石碑

屋敷林を背景にした青柳宅の海鼠（なまこ）壁の土蔵

南原は、「原」という地名が示すように、長らく開発の手が付かず原野になっていた場所である。それが江戸前期の延宝６年（1678）以前に、烏川からの上堀堰の利用と、田多井堰や神沢・中沢・寺沢の末流を集める深沢の水によって原野を開き、足りない分は梓川から引いた小田多井堰の余水をもらって、上堀金村を親村として開発された集落といわれている。その後、文化13年（1816）に奈良井川から水を引いた拾ヶ堰が開削され、さらに水田が開かれた。

南原の屋敷林

南原には集落の北端に、田園の中に独立した立派な青柳宅の屋敷林がある。道路側には明治時代に松本城の旧城門を移築した門があり、これに沿って石垣と生け垣が続いている。以前と比べて屋敷林は３分の１程度に減少したが、本棟造の母屋と門、多様な樹種により構成された屋敷林が田園風景と見事に調和している。

南原の道祖神

青柳宅の門前、道路の向かい側の基壇上に５基の石碑が並んでいる。寛政10年（1798）の念仏供養碑、

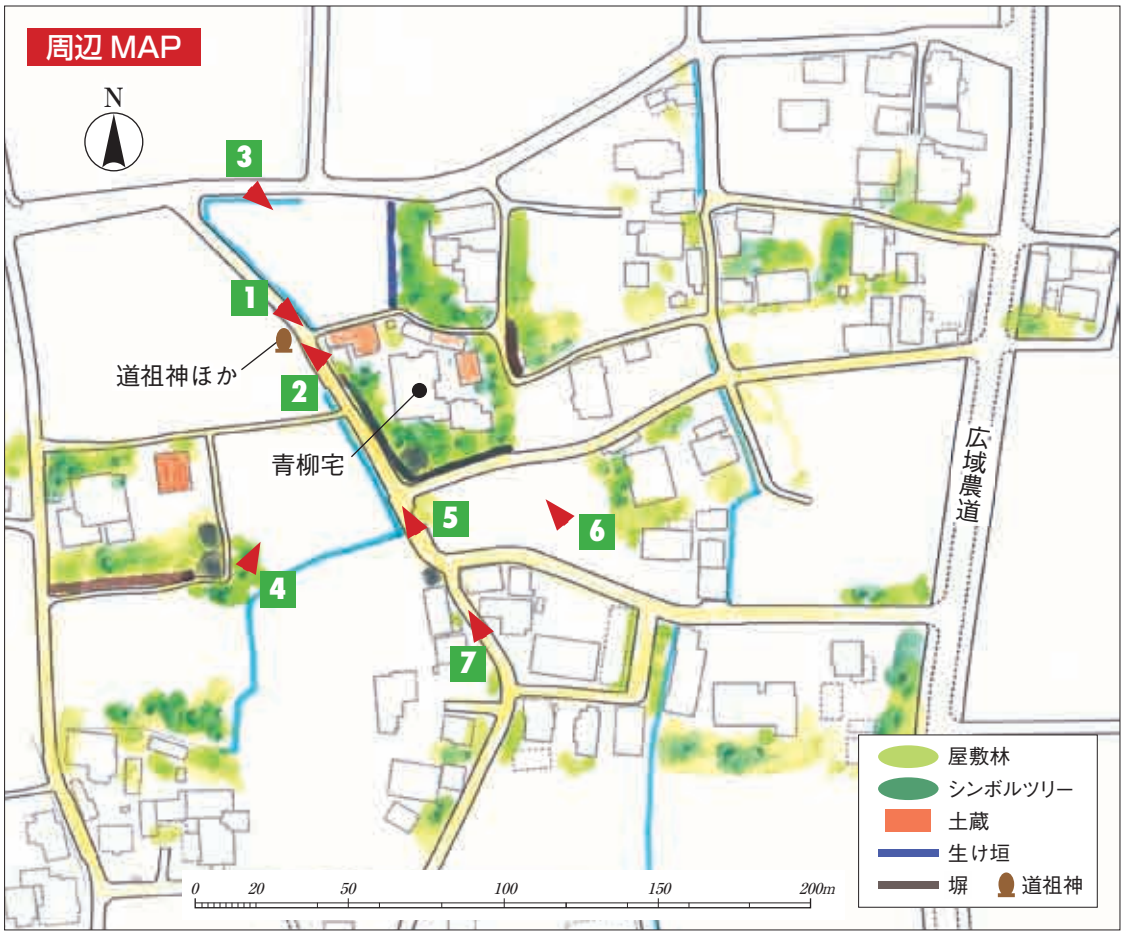
水鏡に映る、多様な樹種により構成された美しい屋敷林

道路沿いの美しい石垣と生け垣

屋敷が隠れてしまうほどの緑の森

道路沿いにあるマツの古木と屋敷林

天保12年（1841）の庚申塔、無銘の庚申塔と二十三夜塔のほかに、文政12年（1829）の酒器を持つ双体道祖神が立つ。像の向かって左には「上堀金南原」と刻まれている。毎年2月9日にはこの道祖神前で甘酒祭りが開かれる。子供たちが前を通る人に甘酒を振る舞い賽銭をもらう古くからの祭りである。



3-7 中堀（なかほり）　拾ヶ堰が流れる屋敷林

安曇野市堀金烏川

屋敷林の中をゆったり流れる拾ヶ堰

中堀公園北の屋敷林

清兵衛木戸に並ぶ道祖神などの石碑

中堀は江戸前期に開発された新田村である。中央の道に沿って両側に短冊型の屋敷割りがなされ、南北に長い宿場町のような街村を形成しているのが特徴である。地勢は烏川扇状地の扇端に位置し、中萱・住吉・小田多井・上堀金・下堀金・成相本村・成相町村・新田町村の各村境に成立した。

貞享騒動の翌年の貞享４年（1687）、筑摩郡会田組執田光（しったこう）村の（和田）甚左衛門が中心となって出願し、松本藩の命令で用水の工事が始まった。当初は真鳥羽堰を延長した中堀堰によったが、天保14年（1843）勘左衛門堰、弘化元年（1844）温（ぬる）堰、弘化３年（1846）拾ヶ堰に加入して水利が安定した。最初22戸だった村も、明治６年（1873）には123戸と大きく発展している。

中堀の屋敷林

南北に長い街村をなす集落で、中央を拾ヶ堰が東西に横切っている。主に北アルプスを望む西側に屋敷林が続いている。表通りにはケヤキの大木が多く見られ、特に拾ヶ堰との交差部分はケヤキが連続して美しい景観となっている。拾ヶ堰より北側ではス

北アルプスを背景に田園風景の中を流れる拾ヶ堰と直交して連続する屋敷林

道に沿って流れる水路と石垣

塀に囲まれた佐々木宅の屋敷林

未舗装の小路沿いに続く美しい生け垣

ギなどの針葉樹も多い。

佐々木宅の屋敷林

道路より一段下がった集落の南端の角地に建ち、約1,000坪の敷地は母屋が見えないほどの緑に覆われている。現在はコンクリートとなっている周囲の塀は、大正時代までは趣のある板塀であった。高床式に増築された母屋の南側には、モチノキやカシが植えられた立派な和風庭園がある。

3-8 小田多井（こただい）　南北に連なる屋敷林

安曇野市堀金三田

田園風景の中のケヤキを主体とした丸山宅の屋敷林

下村の道祖神　文化７年（1824）の造立

生け垣と一体化した一志宅の屋敷林

小田多井は江戸前期に成立した新田村である。寛永16年（1639）田多井・田尻両村の入会原に「四ツ家」ができたのが、その前身であった。

その後、慶安元年（1648）温堰（ぬる）末流の住吉神社を横断する御手洗（みたらし）堰を延長して、24戸の小田多井新田村が成立した。この頃、松本藩領内でも新田開発が進み、成相新田・住吉など各村が成立している。５年間は無税であったが、慶安５年に（1652）初の検地があり、87石であった。

しかし、温堰末流の御手洗堰は水量が不安定であったために、寛文13年（1673）新堰掘替願を提出。なかなか認められず、以後出願を繰り返し、ようやく延宝６年（1678）分水口を上流の野沢に付け替えた小田多井堰の開削が実現した。享保７年（1722）には小田多井村の石高は104石に増加している。

小田多井の屋敷林

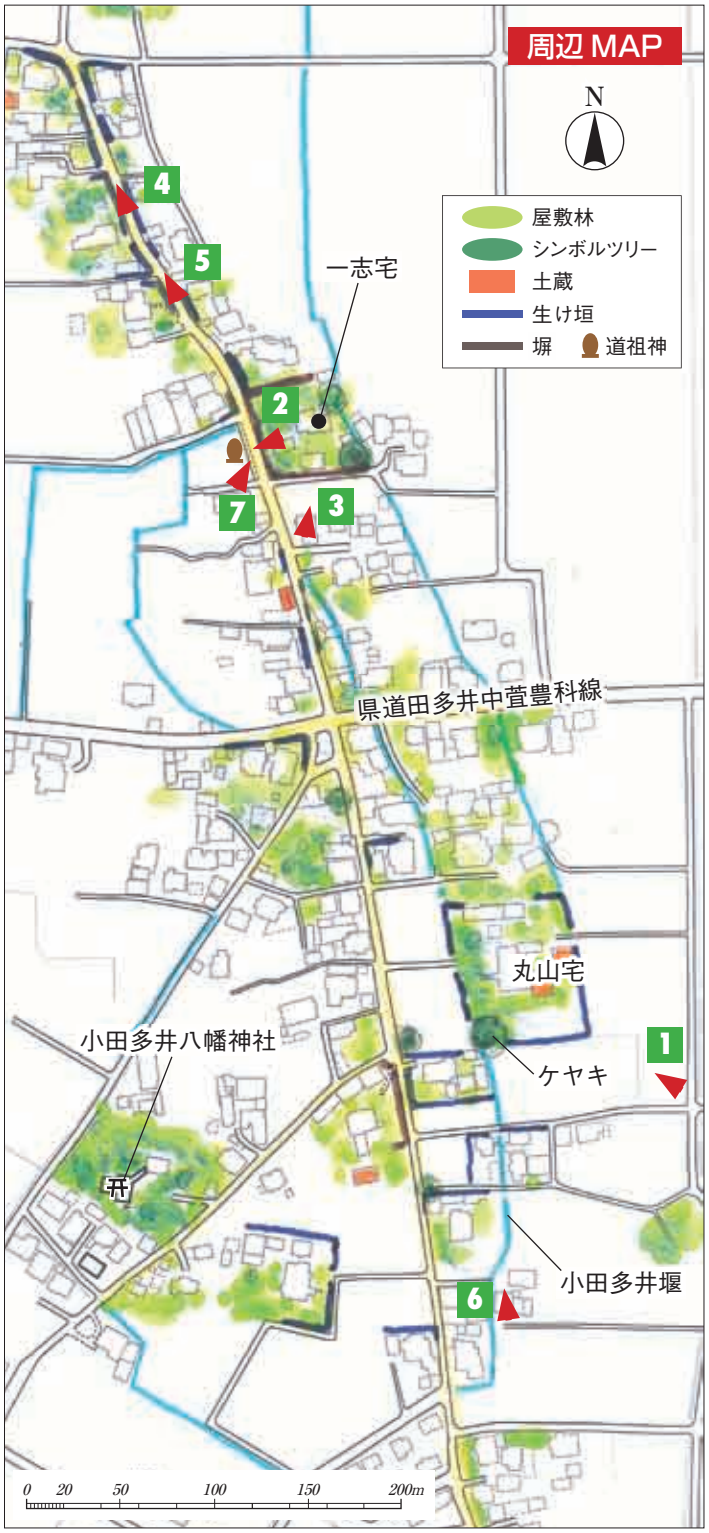
広域農道の西側に平行して、南北に街村をなす集落が連なっている。県道田多井中萱豊科線を境に集落が北と南の二つに分かれ、表通りに沿って屋敷林が点在している。集落内には規模の大きな屋敷林も

道沿いに連なる緑の生け垣

道沿いに屋敷林が連続した美しいまちなみ

ケヤキの大木と北アルプス

マツの古木と調和した一志宅の板塀



点在し、主に北アルプスを望む西側が針葉樹林、田園風景が続く東側が落葉高木で構成され、立派なケヤキの大木やアカマツの古木もある。

一志宅の屋敷林

約1,000坪の敷地は針葉樹主体の構成で、数寄屋（すきや）造の母屋がほとんど見えないほどの屋敷林に覆われている。敷地内には見事な枝ぶりのマツの古木も多く、西側の板塀との調和が美しい。玄関へのアプローチとなる南側は生け垣が連なり、緑のカーテンのように屋敷林と生け垣が一体化している。

大庄屋山口家

山口家は松本藩長尾組の大庄屋を勤めた家で、母屋は元禄16年（1703）の建築と伝える。入母屋・桟瓦葺・平屋建（改築が加えられている）で、10畳間が７室連続し、東端には床書院付きの上段の間がある。門は薬医門。

庭園は江戸時代の延宝年間～天和年間（1673～84）の作庭とみられる。東西にやや長く、中央の池泉の西には亀島が浮かび、これに板橋・切石橋が架かる。北東には石組で滝を表現し、北には石造の五重塔を配置する。松本藩の材木奉行を兼務しており、その役所跡が隣接する。

松本藩主もたびたび逗留し、東端の床書院付きの上段の間から庭を眺めたという。明治時代には登山家のW.ウェストンが一夜の宿を求め、ここから常念岳に登った。22代の山口蒼輪（1913～50）は日本画家として著名である。

近世豪農の屋敷構えと庭園の豪壮さは地方でも希に見るものであり、板塀で囲まれた広大な敷地は背後の山並みと一体化し、安曇野を代表する美しい屋敷林を形成している。

庭園を望む書院の間など家屋の一部と日本庭園が見学できる（有料・火曜日休園）。

板塀で囲まれた広大な敷地の屋敷林　背後の山と一体化して見える。

平成 21 年に県の名勝に指定された山口家庭園

300 年の歴史を持つ旧大庄屋邸の正面